

礫亭文庫蔵鳳朗関係資料紹介

——越後俳人二川との交流など——

金 田 房 子・玉 城 司

要旨 玉城司の所蔵する礫亭文庫には、越後魚沼の富農で俳諧を愛好した増田二川旧蔵の俳書約五十点や当時の著名職業俳諧師からの二川宛書簡などが所蔵されている。天保の三大家の一人としてあげられる鳳朗は何度も越後に足を運んでおり、両者の深い交流がこれらの資料から見えてくる。

本研究は地方の文化人の俳諧活動と、諸国を行脚した著名な職業俳諧師との交流の様子を明らかにすることを目的とするが、その具体例の一つとして、本稿では二川旧蔵資料を取り上げ、二川と鳳朗との関わりを書簡の記述も読み解きつつ紹介する。併せて二川関連以外の同文庫所蔵の鳳朗関係資料も紹介し、その活動を跡づけることにしたい。

キーワード…江戸後期俳諧 鳳朗 越後

はじめに

江戸時代、地方の有力者であった豪農や豪商が、高い教養と文化活動への情熱を持ち、時には家産を傾けるほど

に、惜しめない金銀を費やしたことは、よく知られている。現在でも地方の素封家の蔵には、その名残として著名な絵師・書家・俳諧師等の作品が残されているように、そうした地方の富裕層は、広く旅の文化人を歓迎して厚くもてなした。そして多くの場合、最も熱意を注いだのが俳諧であった。

本稿において取り上げる越後魚沼の二川もそのような一人であった。二川の家に伝わった俳諧資料がまとまって所蔵されているのが礫亭文庫である⁽¹⁾。本稿では、礫亭文庫蔵の二川関係資料を中心にそれ以外の同文庫資料も加え、天保の三大家として名の知られた俳諧宗匠・鳳朗との交流の様子を見てゆくことにしたい。

鳳朗⁽²⁾(一七六二〜一八四五)は熊本出身で江戸に住し、広く行脚して各地に多くの門人を持ち熱く迎えられた。五十五歳頃までは対竹、その後七十一歳頃まで鶯笠を名乗り、晩年八十四歳で没するまでの号が鳳朗である。主に対竹を名乗っていた壮年期に一茶と交流が深かったことが日記の記述や書簡によって知られている。礫亭文庫にも両者の交流を示す書簡が蔵されているが、これについては、今回は簡単な紹介にとどめ別稿で詳しく検討することにした。

一、『いとかり草紙』書き入れ

二川については、平林鳳二・大西一外編『新選俳諧年表』(大正12年刊)に、

二川、増田氏、称太郎吉、越後人、文化年中

とする以外に伝記は知られていない。編著として自撰の『二川発句集』、父・山川の追悼集『かさのはらひ』(文化五年(一八〇八)金令舎道彦序・国会図書館蔵)がある。同書所収の山川の文や、二川の書写した『樗良発句集』⁽³⁾の蔵書印によって、越後魚沼郡仙田村の農人であったことがわかる。

二川は、諏訪社奉納発句の願主をつとめて、『諏訪社奉納発句集』(稿本二冊―現存一冊)を編んだ。これには、

二川と父・山川の発句ほか、十日町とその周辺の地域の人々の句を収載している。また、寛政十年（一七九八）初冬、越後十日市の松苧神社に奉納するための発句集『奉納松苧山発句稿（上中下）』三冊を編んでいた。これには橋良の門人・廬呂の発句を収録している。なお別に『松苧神社奉納発句（一〜六）』六冊があり、これには『北越雪譜』の著者・鈴木牧之の発句を収録している⁴。神社を中心地（地域の核）として六日町や塩沢など近隣地域をむすび、積極的な俳諧活動をしていたことが窺われる。

一方、父の追悼集を道彦の手助けを受けて出していること、『二川発句集』に「道彦追悼」という前書が見られること、さらに書簡貼り交ぜ集（後掲）の道彦からの来信などから、鈴木道彦との交流が深かったことがみてとれる。ちなみに、鳳朗は江戸に出て道彦に学び、俳系としてはその門人にあたるとされている。

二川と鳳朗との交流を示すものとしてまず注目されるのは、『いとかり草紙』の裏見返しに記された二川の書き入れである。

『いとかり草紙』は鶯笠（鳳朗）編、文政七年（一八二四）刊。吉野行脚に出立するに際し道中出会う「諸好人」への土産にと諸家の句を集めたもので、旅の後に紀行の文を執筆し、併せて一書とする「糸」口となる「かり」の「草紙」であるという。例えば、『おくのほそ道』のあとを辿った女流俳人諸九尼の『秋かぜの記』の上巻が紀行文、下巻が旅中に交流した諸家や送られた句を編んだ句集であるように、記念と感謝の意をこめて紀行の後に書を刊行した例は枚挙に暇がないが、旅の前に句集部分だけを板行するというのは、珍しい。そして、「仮」のものであるにしては、すつきりとした美しい装丁、板下である。それほどに、旅の先々で出会う人々への懐かしさ、思い入れが強かったのであるうか。あるいは、刊行を急がねばならない現実的な理由があったのだろうか。併せて一本となる筈であった「芳野紀行」は残らず、句集の刊行を以て事は足り、刊行されなかったものとみてよいであろう。

冒頭には「文政七年甲申春、芳野記行」とあって文はなく、「天門にむちうたれ盤石をしのぶのおそれなく、全

身たゞちに月花に飛ぶ。風雅の奇術軽きこと塵埃も及ばず。風、我に乗か。われ風にのるか。」という、やや気負った長めの前書を付した鶯笠の句、

雲と聞く雲をしる辺の首途がさ

を立句とする十三吟の歌仙を置く。順不同で無名の俳人にまじって、一茶・卓池・護物・蒼虬・月居ら錚々たる著名俳人の句が並ぶ。そして、巻末近くに、二川の句「とりはずす螢は殊に光けり」も収録されている。

地方の俳諧愛好者にとつて、名だたる宗匠と名を連ねた集は、何より嬉しい「手土産」であったことだろう。末尾には美しい字で、文政七ノ五月来着。おじゃ（小千谷）より送り来也。

東都田川鶯笠宗匠より

芳野行脚。帰りは北越

かけてのり、手みやげ。

と、書き付けられている（図1）。

この書き入れからすれば、この旅で鳳朗と二川は直接に会う機会はなかったようであるが、これと関わりがあると推察される書簡が残る。次に書簡から、両者の関わりを見てゆくことにしたい。

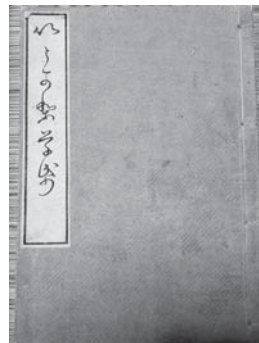
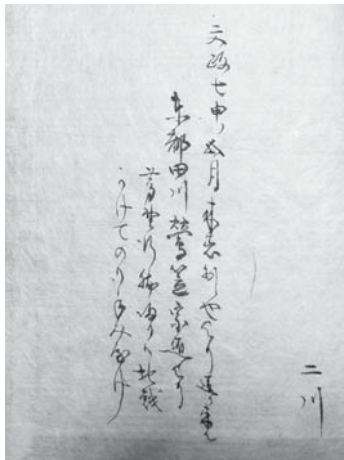


図1

二、二川宛鳳朗（鶯笠）書簡

磔亭文庫には、二川そしてその子息と考えられる奚流に宛てた俳諧宗匠の書簡を貼り交ぜにした卷子が所蔵されている。「間屋清潤」「窓下発鯉」と題する二巻からなる大部のものである。送り主には、道彦・応々（道彦の妻）・蒼虬・護物らの名が見え、二川が特定の宗匠にこだわって師事するというのではなく、当代の著名な俳人と広く交流していたことが窺われる。これに鳳朗の書簡が九通収められている。

- a 正月廿三日付 二川宛 鶯笠
- b 二月五日付 二川宛 鶯笠
- c 三月三日付 二川宛 鶯笠
- d 弥生八日付 二川宛 鶯笠
- e 六月五日付 二川宛 鶯笠
- f 文月十五日付 二川宛 鶯笠
- g 霜月十六日付 二川宛 鶯笠
- h 水無月五日付 奚流宛 鳳朗
- i 霜月五日付 奚流・松翠宛 鳳朗

本稿ですべてを紹介することはできないので、○印を付した二つの書簡を取り上げることにした。まず、前の『いとかり草紙』との関わりが推察されるのが、b（図2）の書簡である。

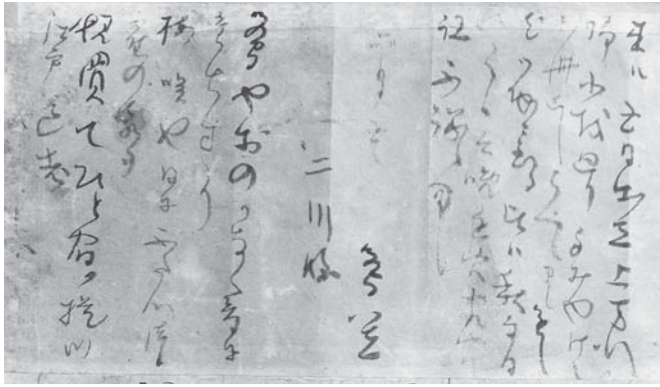


図2

二月五日

二川様

鶯笠

来ル五日出立、上方行
 帰、北越廻り、手みやげ之
 小冊こしらへ候ま、進之候
 尤、御地ニ至る比は秋なる
 べく候。今晚近火、客中
 認、不詳候。勿々

意識

来る五日に出立して上方へ行き、
 帰り道に北越を廻って、手みやげの
 小冊子を揃えましたのでお送りします。
 もっとも御地（魚沼）に至る頃は秋になつてい
 ることでしょう。今晚近くで火事があり、避難先
 で書いていますので、詳しくかけません。勿々

鶯やおのがなく音に
 たちすがり
 梅咲や日にふたつづ、
 鶴の声
 蛸買てひと宿ク提つ
 江戸道者

『いとかり草紙』持参の旅の出立は春と記されているから、仲春の二月⁵は時節としては符合する。『東京市史稿』によれば、文政七年二月一日に江戸で大火、翌二日にも後火災があったとする。財産などもたぬ俳諧師の身、避難先から直接に旅立ったのであろう。魚沼到着は秋頃と予想していたのが、意外に早く仲夏の五月となったのではないだろうか。

もう一通、次にd(図3)の書簡を紹介する。砥の粉色の間に薄缥色の両紙を継いだ、やや贅沢な紙に書かれており、鳳朗の二川に対する敬意が窺われる手紙である。これ以外にも砥の粉色両紙に青で芒の穂を散らした地模様のもの、蜂が描かれたものなど、通常よりは、こだわった良質の紙に書かれているものが多い。

こちらは逆に上方滞在が長引いて、帰りに北陸筋を通って魚沼に立ち寄るつもりであったが、尾張で既に雪の季節になったため、雪の多い北越・信濃路をあきらめ、中山道を通って途中門人の多い甲州も駆け抜けるように江戸に帰ったこと、そして山積した雑事に追われて、帰着の挨拶が遅れたことを詫びている。

後のことになるが、天保十一年(一八四〇)七十九歳で鳳朗は『続礪浪山集続有磯海集』として紀行文にまとめた旅に出る。上州から北越高田を経て北陸へ、市振などを訪れた後、糸魚川から松本へ抜ける間道を通り険峻な峠続きの道を歩き続けて諏訪から甲府・石和・谷村・都留と甲州路をたどり、各地で門人達に歓待され俳席を重ねながら、再び秋山越という険しい間道を通って相模に出、江戸に戻っており、年齢からは想像もつかない健脚ぶりに驚かされる。dの二川宛書簡が何年のものかは不明ではあるが、このとき甲州路をたどった経験が、晩年の旅にも生かされたのであろう。

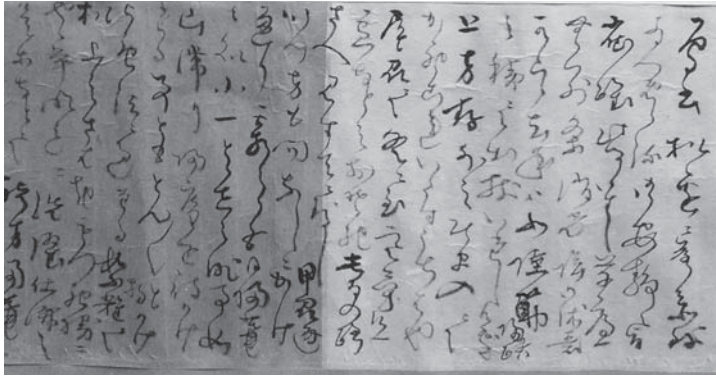


図3

鷹書、机辺ニ落、忝致

拝閱候。弥御安静之旨

雀躍此事御座候。草廬

無別条消光陰御休意

可(被)下候。去年は北陸筋帰路

之積ニて出杖いたし候処

上方存外之ひま入ニて

かれこれいたすうちはや

尾州ニて冬ニ至、寒氣且

雪など之おそれ、しなの路

さへ見すてニ致し、甲州辺

いづ方も問なしニかけ

通り、霜月五日帰庵

之処、小一とせの俳事如

山滞り、帰庵を待かけ

たる事どもどんぐりと持かけ

られ法ニ過たる繁雜ニて

机上之さはぎ、もつれ勝ニ

や、年明迄ニ洗濯仕済之

お便りとどきました。ありがたく

拝読いたしました。ご無事で経過の由、

とても喜んでおります。私の方も

変わりなく暮らしておりますので、ご安心

下さい。去年は北陸筋を帰路にする

つもりで出立いたしました、

上方での用事が思いの外手間取って、

かれこれしているうちに早くも

尾張で冬になってしまい、寒氣や

雪などのおそれがありますので信濃路

さえ、行くことをやめ甲州路を通りましたが

(そちらの門人も)誰も訪ねずに、慌ただしく

通り過ぎ、十一月五日、江戸に帰って

まいりましたところ一年弱の留守中の俳事が

山のように滞っていて私の帰りを待ちつけた

用事もほとんどと持ちかけ

られて秩序を越えた煩雜さで

机上の上の騒ぎも混乱しがちで

何とか年明けまでには片付きそうですが、

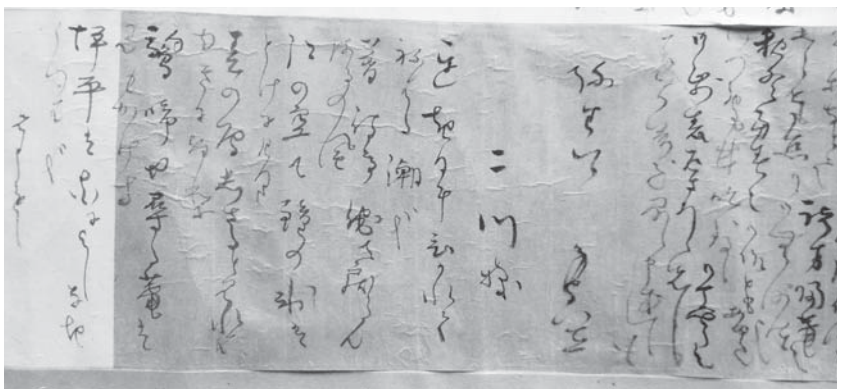


図3

是等などにて諸方帰庵之
しらせも怠りご無沙汰申候。

こんなことで、あちらこちらへの帰庵の
報告も怠り、ご無沙汰申しました。

秋冬当春之御作どもあまた

秋・冬・この春のご句作、たくさんお知らせ下

いづれも甘吟致候。御丁寧之

さり、どれも感吟致しました。丁寧にお送り

御紙表かたはけ辱な存候。先々

下さった紙表ありがとうございます。まずは

以上御答迄早々申述候。以上。

ご返信まで、取り急ぎ申し上げます。以上

弥生八日 鶯笠

二川様

遅き日にひかれて

ねばる潮哉

暮待て侘て戻らん

はるの風

きの空で鐘の水は

とけにけり

春の雁しさと見れば／ゆきにけり

鶯啼や尋る庵は／見もかけず

坪平は花によしなき

うつは哉

先申進之候

「御丁寧之御紙表」は、この書簡に用いたような美しい紙のことで、その礼を述べたのであろう。例えばgの書簡に「昨日めづらなる御土産之品一箱 并 白方一片御送惠被下、遠路御厚情之段不浅忝存候。」とあるように、書中には贈り物の礼がしばしば記されている。「白方」は不明であるが、白銀のことであろうか。そして鳳朗からは、「扇面」「短冊」の揮毫依頼を承知した旨が書き送られる。

お互いに近々の句作を報告しあい、門人からは贈り物や謝金が、そして宗匠からはできあがった撰集や揮毫した短冊類が贈られる。こうした関わりについてはこれまでも報告されているが⁽⁶⁾、二川に宛てた鳳朗書簡からも、地方門人と宗匠とのそうしたつながりを生き生きと垣間見ることができるのである。

三、その他の鳳朗関係資料

二川関係ではないが、礫亭文庫には鳳朗に関わる興味深い資料が所蔵されているので、これらについても報告しておきたい。

まず「対竹」号の時代の資料として、「けし一もと背の延過て哀れ也 ヒヨ対竹」を所収する素壁編『続草枕集』(文化七年(一八一〇)刊)がある。素壁(一七五八―一八二二)は信州上諏訪の油問屋で、士朗にも学び、行脚俳人を厚遇、指導したことで知られる。対竹時代も鳳朗は諸国を行脚し、士朗の序を付して師・綺石の追善集『いけのむかし』を刊行している。士朗の紹介で素壁を訪ね、そのもてなしや援助をうけたこともあったのであろう。

次に「文化十一年随齋成美一枚摺」(部分・図4)。これは痛みが激しく、残念なことに前半部分が失われているが、幸い最後の主催者名と、対竹の句を読み取ることができる。文化頃、肥後から諸国を行脚していた鳳朗が、しばしば浅草蔵前の札差で一茶の庇護者でもあった成美宅に出入りしていたことは、一茶『文化句帖』の文化三年(一八〇六)十一月三日の項に「肥後対竹来ルニ付、随齋会ニ歌仙有。」とあることによって知ることができる。

この一枚摺と同じ年の文化十一年九月二十四日の記載にも、

晴 申刻ヨリ雨。随齋二入。訪対竹。

(一茶『七番日記』)

とあって、この時期に直接成美との交流があったことがわかる。

鶯笠の頃の句が入集するものとしては、『丘象潟集』(慶五編・文政二年刊)、『蘆陰集』(竺斎編・文政三年刊)、『雪のかつら』(里丸編・文政四年刊)、『花野集』(虎杖庵八朗編・文政七年跋刊)、『美佐古』(茶静編・文政八年刊)などをあげることができる。中でも『丘象潟集』所収の句に、

鳥海が峰のけはしきに肝をひやし三山の尊きにこゝろすみて、長き險難も夢路をたどることく、ふた、びおほ江戸にかへり。

と前書があることから、文化元年(一八〇四)象潟地震の後に鳳朗が象潟方面に行脚したことを知ることができる。

図5の俳人番付は年次の記載はないが、道彦の名が見えないことから文政三年以降、文政九年に没する玉屑の名があることからそれ以前のものでと推定できる。中央の「差添」に「鶯笠」の名が見え、この頃宗匠としてかなりの実力を持っていたこと、号の読みは「オウリツ」であったことが確かめられる。

他には鳳朗を称してからの一枚摺として「自然堂藏本」(天保五年(一八三四)、文音として句が見える天保六年、知可良ちからの歳旦一枚摺、同じく知可良の「芭蕉百五十遠回追福」(天保十四年)がある。

「自然堂藏本」は、折本を開いた形を空押しにしてこれに句を書き付ける趣向であるが、表紙にあたる部分に璃色ほかしの彩色をして源氏香を模様とし、「自然堂藏本 わかなかみ」と中央題簽を描いて『源氏物語』の体裁にするという遊び心がみえる。知可良は吉川氏きよかわ。越後南魚沼郡六日市の修験者で俳諧でも一門を率いた。天保六年、幕末アメリカ船の来航に際し、葛城山上で道衆百人を率い祈願したという(『国書人名辞典』)。「芭蕉百五十遠回追福」は、芭蕉の「水仙や白き障子のともうつり」を短冊として描き、巻頭に文音の鳳朗句を載せる。

芭蕉百五十回忌は、鳳朗が京の二条家に請い「花下大明神」の神号が授けられたように、芭蕉の神格化が進み、各地で句碑の建立など盛大に催しが行われ、この前年あたりから記念の俳書や摺り物の刊行が続く。これもその一つである。そして知可良との交流を示すこれら二点もまた、鳳朗と越後との関わりの深さを窺わせる⁷⁾。

以上に紹介した他に、次の句を記した短冊五点、

まがふもの二月にもなきやなぎ哉 鶯笠

鶯は名から声からひと調子 鶯笠

うぐひすや来ぬ日もあれば啼日あり 鳳朗

手もとから外水にする田植かな 鳳朗

誘はれて見る眼のゆるる牡丹かな 鳳朗

扇面一点(啼さかりなくてしまひぬほと、ぎす 鶯笠)、画賛一点・軸物一点がある。画賛・軸物については、別に紹介する予定である。

付、一茶宛鶯笠書簡

一茶宛鶯笠書簡(十月十四日付)は、半紙状の紙に書かれたもので、二川宛の書簡と比べて全体から受ける印象や書体が異なるので、写しの可能性もあるが、文化十四年(一八一七)五月跋刊の『芭蕉葉ぶね』に関わる記述があるなど、注目すべき内容が豊富である。『芭蕉葉ぶね』(俳書大系近世俳話句集・一茶全集別巻に翻字)は、熊本から江戸に出て来た鳳朗が、俳壇に立とうとして正風俳諧を鼓吹した書で、鳳朗の活動において重要な意味を持つ。貞門・談林を「二別」、江戸座・美濃派・伊勢派を「三変」と称して正風にあらずとし、雪門・葛飾派、五色墨派など各門派を批判する。この書の校合を務めるのが一茶である。これまで、鳳朗が一茶に『芭蕉葉ぶね』の好評を

伝えた添え状（新潟県高田市三郷下四ツ屋木村秋雨氏蔵。矢羽勝幸氏「さらば笠考」〔本庄市史拾遺〕二卷七号）一茶全集6所載）が知られていたが、これは刊行以前の書簡で、句の作者の誤りを一茶から指摘されたのに対して丁寧な詫び、校合の一茶に迷惑がからぬようにすると伝えている。

即ち『芭蕉葉ぶね』刊行以前の十月十四日、おそらく前年の十三年に鳳朗が一茶に校合を願い出て、一茶が返信で誤りを指摘、さらに鶯笠が一茶に書いた手紙がこれである。

他にも門人についての記述など、豊富な内容を含むので、稿を改めて紹介するにしたい。

おわりに

各地の旧家や文書館に辛うじて残された素人俳人達の活動の記録は、文学的な価値が認められず、その数の多さと各々の知名度の低さから、ほとんどが注目されないままに置かれている。しかし、当代においては、こうした文芸活動こそが日本全国に広がったメジャーなものであった。その各地方の点と点を結び役割を果たしたのが、鳳朗ら著名な俳諧宗匠であり、頻繁に書簡を交わし、ために各地を行脚して連句の会に一座した。その鳳朗でさえ、本文に示した句からも推察できるように、膨大に残されたその作品の価値は、芭蕉とは比べるべくもないと言わざるを得ない。

しかし、地方の文化人達が俳諧に傾けた熱意は、俳諧という庶民文芸の重要な特性として研究に値すると考える。本稿はその小さな報告であるが、彼らの息づかいが聞こえるような資料の一つ一つに光をあて、今後も紹介してゆきたいと考えている。

注

- (1) 玉城司藏。長野県長野市。俳諧関係の資料を中心とした数千点にのぼるコレクション。二川関係のものとしては、俳書約五十点・二川らに宛てた俳人の手紙を貼り交ぜにした卷子二巻（第二節参照）を所蔵する。
- (2) 鳳朗の伝記については、『肥後先哲偉蹟』（肥後文献叢書別巻1、昭和46年）、中村俊定「田川鳳朗」（明治書院『俳句講座』3、昭和34年）が詳しい。また、上州高崎の門人の家に残された俳諧資料を検討した、金田房子「鳳朗の添削―矢口丹波記念文庫資料から―」（『俳文学報 会報大阪俳文学研究会』51 平成29年10月）、同「最晩年の鳳朗―一多宛吉田永久書簡から―」（『俳文学報 会報大阪俳文学研究会』52 平成30年10月）をご参照いただければ幸いです。
- (3) 荻野清「栲良句集をめぐる考察」（『連歌俳諧研究』1 昭和26年11月）によって整理された四種、すなわち加賀小松の一斧が編集した稿本・天明本・寛政本・栲良自筆本のいずれとも異なり、二川がこれらとは別のテキストから写したと考えられる。前書・句形は寛政本に近いものが多いが、寛政本を見たのではなく、その元資料と言うべきものに拠ったと思われる。
- (4) 牧之もまた、こうした寺社への奉納行事に積極的に関わった。『新潟県史 通史編5』によれば、「享和元（一八〇二）年、牧之は同郷の井口茂兮とともに近郷浦佐の普光寺境内に俳句額を奉納した。」また「牧之の『秋月庵発句集』下には、わざわざ奉納句撰之抜句法楽」と副題して牧之が近郷の神社に奉納した作品や奉額選句の折の詠を四九句も列記してある。」とする。
- (5) 五日付けの書簡であるから「来ル五日」は三月五日とも考えられるが、それほど先の予定を伝えたようには思えないので、一応二月五日の出力と考えておきたい。
- (6) 伊藤智子「俳人・鶴田卓池の菅沼鷺洞宛書簡―師弟の交流を垣間見る―」（豊田市郷土資料館だよりNo.47 平成16年3月）など。
- (7) この他、鳳朗の晩年に江戸で親炙した越後出身の門人に風外（史千）がいる。鳳朗が二条家から「花下宗匠」の称号を許された際に、「宗匠風外、御名代鳳朗」として宗匠役を風外に譲り、風外が脇句、鳳朗が第三を付けた。「天保十四卯歳九月廿六日於二條殿御興行」の立派な懷紙が新潟県立文書館に所蔵されている。また、見附の松岡茶山との交流は、茶山編『梅草紙』等の俳書に見ることができる。本文でも引用した『続磯浪山集続有機海集』には越後高田の門人・魚都里との深い交遊の様子が描かれている。これには茶山が送った句も収録されている。

付記 書簡の難読箇所について、岩田秀行氏・紅林健志氏にご示教いただいた。

本稿は科研費補助金による研究課題「近世後期俳諧と地域文化」（課題番号：16K02435）による成果の一部である。

An Introduction to Hōrō-related Documents Preserved in the Rekitei Library: His Interaction with Jisen, the Haikai Poet of Niigata

KANATA Fusako/TAMAKI Tsukasa

Abstract The Rekitei Library, owned by Tamaki Tsukasa, houses a collection of written materials that previously belonged to Jisen, who was an affluent farmer and haikai-lover in Uonuma, Niigata during the late Edo period. This collection contains about fifty haikai books and a number of letters addressed to Jisen from the renowned professional haikai poets of the age.

The documents reveal that Hōrō, one of the three great haikai poets, frequently visited Niigata and closely interacted with Jisen.

This research aims to shed light on the literary activities of the local intellectuals, as well as the interactions among prominent professional haikai poets who traveled around the country. For instance, it uncovers the relationship between Jisen and Hōrō through a close examination of the written materials once owned by the former and the letters the two exchanged.

In addition to Jisen-related texts, it also introduces the documents concerning Hōrō, tracing his accomplishments.

Key words: Haikai in the late Edo period, Hōrō(鳳朗), Niigata Prefecture